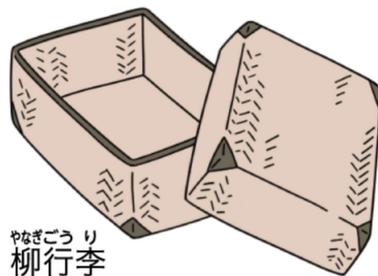


物を大切にする心

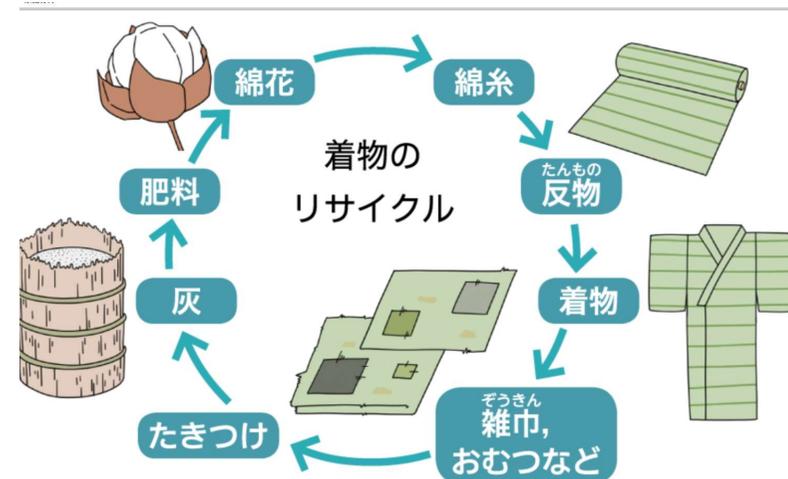
江戸時代は、現代よりも資源が少なく、人々は「物を大切にして最後まで使い尽くす」という考えで生活していました。リユース及びリサイクル業者がたくさんあり、着物、履物、食器、おけ、傘などの日用品は、ほとんど再使用していました。こうした考え方や取り組みは、現代の循環型社会に向けた取り組みを進めるうえでも参考になります。

江戸時代の衣生活

一般の人々は、1枚の着物を季節に合わせて裏地を縫い付けたり、綿を入れたりして、仕立て直していました。新品を買うことはめったになく、着物が必要になると古着屋で古着を買い、必要がなくなれば売っていました。着物は1～2枚しかもっていなかったため、家にたんすはなく、つづらや柳行李（やなぎごうり）という箱の中に入れていました。

やなぎごうり
柳行李

古着屋



着物のリサイクル

江戸時代の人々がふだん来ていた着物は、綿花をつむいで綿糸にし、綿糸を織って反物にし、その反物を縫って作られていました。

着物が古くなって着られなくなると、おむつや雑巾として使用していました。また、それらがぼろぼろになったら、火をたくときの焚き付けとして使い、燃えた後の灰の一部は、綿花を栽培するための肥料にしていました。

灰は肥料にするほか、染め物などに使う溶媒の原料にもなりました。このように着物は徹底的にリサイクルされていたのです。

☆現代の自分の生活に生かせるヒントとなる内容に線を引いてみよう☆
衣服を「買うとき」「使うとき」「捨てる時」について考えてみよう。